非線形シグマ模型とその摂動論

Part I ~ 対称性の自発的破れの低エネルギー有効理論 Part II ~ 標準模型を超える素粒子模型の構築へ向けて

於、長野県木島平、原子核三者若手夏の学校 2004 年 8 月 5 日 ~ 6 日

棚橋 誠治 (東北大学大学院理学研究科)

Part I.

§.1. 対称性とその自発的破れ

(南部ゴールドストンボソン、ゴールドストン定理)

§.2. 非線形シグマ模型

(カイラルラグランジアン、CCWZ の処方箋)

§.3. 非線形シグマ模型の摂動展開

(SU(3)カイラルラグランジアンとカイラル摂動論)

Part II.

- §.4. 電弱対称性の自発的破れ
 (ゲージ化されたカイラルラグランジアン、等価定理、 輻射補正とオブリークパラメータ S, T, U)
- §.5. 余剰次元理論 (5 次元ヒグスレス模型) のデコンストラクション
- §.6. 擬南部ゴールドストン粒子

§.7. リトルヒグス模型

§.1. 対称性とその自発的破れ O(N)線形シグマ模型

$$\mathcal{L} = \frac{1}{2} \partial_{\mu} \phi_i \partial^{\mu} \phi_i - V(\phi_i \phi_i), \qquad i = 1, 2, \cdots N,$$

 $\vec{\phi}$ を $\vec{\phi} \equiv [(\phi_1, \phi_2, \cdots \phi_N)]^T$ と定義すると $\mathcal{L} = \frac{1}{2} \partial_\mu \vec{\phi} \cdot \partial^\mu \vec{\phi} - V(|\vec{\phi}|^2).$

ここで、 $|\vec{\phi}|^2 \equiv \phi_i \phi_i = \vec{\phi} \cdot \vec{\phi} = |\phi_1|^2 + |\phi_2|^2 + \dots + |\phi_N|^2.$ この模型のもつ対称性は

$$\phi_i \to \phi'_i = U_{ij}\phi_j, \qquad U_{ij}U_{ik} = \delta_{jk},$$

 $\vec{\phi} \to \vec{\phi}' = U\vec{\phi}, \qquad UU^T = U^TU = 1.$

U は N 次元直交行列 (O(N) の対称性)

ポテンシャル V として

$$V = \frac{\lambda}{4} \left(|\vec{\phi}|^2 - v^2 \right)^2 = \frac{\lambda}{4} |\vec{\phi}|^4 - \frac{\lambda v^2}{2} |\vec{\phi}|^2 + 定数項, \quad \lambda > 0$$

の形を採用する。このとき $\vec{\phi} = 0$ のまわりで ϕ の質量が
 $m_{\phi}^2 = -\lambda v^2 < 0$
(タキオン) となって $\vec{\phi} = 0$ 近傍の真空が不安定になってしまう。
 \downarrow
本当の真空 : $\langle 0 | \vec{\phi} | 0 \rangle \neq 0.$
対称性の自発的破れ (本当の真空は $O(N)$ 変換で不変ではない

本当の真空では、

 $\langle 0|\phi_i|0\rangle = 0, \qquad (i = 1, \cdots, N-1)$ $\langle 0|\phi_N|0\rangle = v,$

となって、もとの対称性 O(N) は自発的に O(N-1) に壊れている。 本当の真空のまわりで場を展開する。

$$\phi_i = \begin{cases} \pi_i, & (i = 1, \cdots, N - 1) \\ v + \sigma, & (i = N) \end{cases}$$

ポテンシャル

$$V = \frac{\lambda}{4} \left(2v\sigma + \sigma^2 + \vec{\pi}^2 \right)^2 = \lambda v^2 \sigma^2 + \lambda v \sigma |\vec{\pi}|^2 + \frac{\lambda}{4} |\vec{\pi}|^4 + \cdots$$

σ と *π* の質量

 $M_{\sigma}^2 = 2\lambda v^2, \qquad M_{\pi}^2 = 0.$ 質量 0 の南部ゴールドストン (NG) ボソン π もともとの対称性 [G = O(N)]の自由度 $\dim G = \frac{N(N-1)}{2}$ 破れずに残った対称性 [H = O(N-1)]の自由度 $\dim H = \frac{(N-1)(N-2)}{2}$

自発的に破れた対称性の自由度

 $\dim(G/H) = \dim G - \dim H = N - 1$

NG ボソンの数=dim(G/H)。(ゴールドストン定理)

$$\pi_i, \qquad i=1,\cdots,N-1.$$

この場合は、もともとのラグランジアンに入っていたポテンシャルを 使ってゴールドストン定理を直感的に理解できる。

N_f フレーバー QCD のカイラル対称性

 N_f 種類の質量 0 のフェルミオンを含む $SU(N_c)$ ゲージ理論

$$\mathcal{L} = \sum_{i=1}^{N_f} \bar{\psi}_i i \gamma^\mu D_\mu \psi_i - \frac{1}{2g_c^2} \operatorname{tr}(F_{\mu\nu} F^{\mu\nu})$$

を考える。ここで g_c は $SU(N_c)$ ゲージ結合定数。共変微分と field strength は

 $D_{\mu}\psi = \partial_{\mu}\psi + iA_{\mu}\psi,$ $F_{\mu\nu} = \partial_{\mu}A_{\nu} - \partial_{\nu}A_{\mu} + i[A_{\mu}, A_{\nu}].$ カイラリティーによる分解

$$\psi = \psi_L + \psi_R, \qquad \psi_L = \frac{1 - \gamma_5}{2}\psi, \quad \psi_R = \frac{1 + \gamma_5}{2}\psi.$$
$$\bar{\psi}\gamma^{\mu}\psi = \bar{\psi}_L\gamma^{\mu}\psi_L + \bar{\psi}_R\gamma^{\mu}\psi_R, \qquad \bar{\psi}\psi = \bar{\psi}_L\psi_R + \bar{\psi}_R\psi_L.$$

$$\mathcal{L} = \sum_{i=1}^{N_f} \bar{\psi}_{Li} i \gamma^\mu D_\mu \psi_{Li} + \sum_{i=1}^{N_f} \bar{\psi}_{Ri} i \gamma^\mu D_\mu \psi_{Ri} - \frac{1}{2g_c^2} \operatorname{tr}(F_{\mu\nu} F^{\mu\nu}).$$

となってLとRに分離する。

.

この模型のもつ対称性は

$$\psi_{Li} \rightarrow \psi'_{Li} = U_{(L)ij}\psi_{Lj}, \qquad U_{(L)ij}U^*_{(L)ik} = \delta_{jk},$$

 $\psi_{Ri} \rightarrow \psi'_{Ri} = U_{(R)ij}\psi_{Rj}, \qquad U_{(R)ij}U^*_{(R)ik} = \delta_{jk},$
 $U_{(L)}, U_{(R)}$ は Nf 次元ユニタリー行列
 $(SU(N_f) \times SU(N_f)$ のカイラル対称性)

 $SU(N_c)$ ゲージ理論のくりこみ群 (漸近的自由性)

- 高エネルギーでは、 $g_c^2 \ll (4\pi)^2$ (摂動論が使える)
- 低エネルギーでは、 $g_c^2 \gg (4\pi)^2$ (非摂動的効果が重要)

非摂動的効果によるカイラル対称性の自発的破れ

$$egin{array}{lll} \langle ar{\psi}_{Li}\psi_{Rj}
angle &\propto & \delta_{ij} \
eq & 0. \end{array}$$

自発的に破れずに残った対称性

 $\psi_{Li} \rightarrow \psi'_{Li} = U_{(V)ij}\psi_{Lj},$ $\psi_{Ri} \rightarrow \psi'_{Ri} = U_{(V)ij}\psi_{Rj}, \qquad U_{(V)ij}U^*_{(V)ik} = \delta_{jk},$ $SU(N_f) \mathcal{O}(L \& R を同時に変換する) 対称性$ もともとの対称性 $[G = SU(N_f) \times SU(N_f)]$ の自由度 $\dim G = 2(N_f^2 - 1)$ 破れずに残った対称性 $[H = SU(N_f)]$ の自由度

 $\dim H = N_f^2 - 1$

自発的に破れた対称性の自由度

$$\dim(G/H) = \dim G - \dim H = N_f^2 - 1.$$

ゴールドストンの定理によれば、 $N_f^2 - 1$ 個の質量 0 の NG ボソンが現れるはず。

$$\pi_i, \quad i = 1, \cdots, N_f^2 - 1.$$

この場合の
$$\pi$$
 の正体はなんだろうか?

注意: もともとのラグランジアンは、スピン 1/2 のフェルミオンとスピン 1 のゲージ場しか含まない。スピン 0 の NG ボソンの候補は含まれていない。

- π は複合粒子(フェルミオンと反フェルミオンの複合状態)であり、
 非摂動的ダイナミクスによって生じる。
- ツリーレベルポテンシャルを使ってゴールドストン定理を直感的に
 理解することは困難。

カレント代数の方法を用いたゴールドストン定理の証明の利点

- NG ボソンが複合粒子の場合でも適用可能。対称性だけを使うの で、非摂動的ダイナミクスの詳細によらない。
- ポテンシャルを使わないでゴールドストン定理を証明できる。

カレント代数の方法を用いたゴールドストン定理の証明 対称性の自発的破れ

$$\delta \Phi = i[Q, \Phi], \qquad Q = \int d^3 \vec{x} j^0, \quad (j^{\mu} \, \mathbf{la} \mathbf{k} - \mathbf{g} - \mathbf{h} \nu \nu \mathbf{k})$$

ウィグナー相 (真空が Q の変換で対称なとき)

 $\langle 0|\delta\Phi|0\rangle = 0 \quad \Leftrightarrow \quad Q|0\rangle = 0$

南部ゴールドストン相 (真空が Q の対称性を自発的に破るとき)

 $\langle 0|\delta\Phi|0\rangle \neq 0 \quad \Leftrightarrow \quad Q|0\rangle \neq 0$

 $\langle \delta \Phi \rangle$ はオーダーパラメータ。

T積グリーン関数を考える。

 $\langle 0|T[j_{\mu}(x)\Phi(0)]|0\rangle = \langle 0|j_{\mu}(x)\Phi(0)|0\rangle\theta(x^{0}) + \langle 0|\Phi(0)j_{\mu}(x)|0\rangle\theta(-x^{0})$ ネーターカレントの保存から

$$i \int d^4x \partial^{\mu} \langle 0|T[j_{\mu}(x)\Phi(0)]|0\rangle = \int d^4x \langle 0|i[j_0(x),\Phi(0)]|0\rangle \delta(x^0)$$

= $\langle 0|i[Q,\Phi]|0\rangle.$

従って、

$$\langle 0|\delta\Phi|0\rangle = i \int d^4x \partial^\mu \langle 0|T[j_\mu(x)\Phi(0)]|0\rangle.$$

問題

- 南部ゴールドストン相では 左辺 $\neq 0$.
- ・ 右辺は表面積分でかける。(たいていの場合は0になるはず。)
 どういう場合に、右辺 ≠ 0 とできるか?

ネーターカレント j^{μ} と Φ の両方に結合している粒子 π を考える。 $\langle 0|j^{\mu}|\pi(p)\rangle = -if_{\pi}p^{\mu}, \qquad \langle \pi(p)|\Phi|0\rangle = Z_{\pi}.$

 $\langle 0|T[j_{\mu}(x)\Phi(0)]|0\rangle$ への π の1粒子状態の寄与

$$\langle 0|T[j^{\mu}(x)\Phi(0)]|0\rangle\Big|_{\pi} = \int \frac{d^4p}{(2\pi)^4} e^{-ip\cdot x} f_{\pi}p^{\mu} \frac{1}{p^2 - m_{\pi}^2} Z_{\pi}.$$

したがって、

$$\langle 0|\delta\Phi|0\rangle\Big|_{\pi} = i \int d^4x \partial_{\mu} \langle 0|T[j^{\mu}(x)\Phi(0)]|0\rangle\Big|_{\pi} = \left.\frac{p^2 f_{\pi} Z_{\pi}}{p^2 - m_{\pi}^2}\right|_{p=0}$$

質量 0 $(m_{\pi}^2 = 0)$ の NG ボソンが存在して、 j^{μ} と Φ の両方に結合して いる場合に限りこの式は $\neq 0$ になる。(ゴールドストン定理)

 $\langle 0|\delta\Phi|0\rangle = f_{\pi}Z_{\pi}$ (f_{π} : NG ボソン π の崩壊定数)

O(N)線形シグマ模型の f_{π}

ネーターカレント

$$j_i^{\mu} = \phi_N \partial^{\mu} \phi_i - \phi_i \partial^{\mu} \phi_N.$$

対称性の破れた真空での場の再定義

$$\phi_i = \begin{cases} \pi_i, & (i = 1, \cdots, N - 1) \\ v + \sigma, & (i = N) \end{cases}$$

したがって、

$$j_i^{\mu} = v\partial^{\mu}\pi_i + \sigma\partial^{\mu}\pi_i - \pi_i\partial^{\mu}\sigma$$

となって、

$$\langle 0|j_i^{\mu}|\pi_j(p)\rangle = -iv\delta_{ij}p^{\mu}.$$

この場合、崩壊定数 f_{π} は、場の真空期待値 v に一致する。 $f_{\pi} = v$.

QCD の f_{π} 現実の QCD $(N_c = 3)$ $m_{\pi} \simeq 140 \text{MeV} \ll m_{\rho} \simeq 770 \text{MeV}$ \uparrow 近似的なカイラル対称性 $SU(2)_L \times SU(2)_R \ (m_u, m_d \ll 1 \text{GeV})$ と その自発的破れ

自発的に破れた対称性のネーターカレント

$$j_{5a}^{\mu} = \bar{\psi}_R \gamma^{\mu} \frac{\tau^a}{2} \psi_R - \bar{\psi}_L \gamma^{\mu} \frac{\tau^a}{2} \psi_L = \bar{\psi} \gamma^{\mu} \gamma_5 \frac{\tau^a}{2} \psi.$$

 π の崩壊定数

$$\langle 0|j_{5a}^{\mu}|\pi_b(p)\rangle = -if_{\pi}p^{\mu}\delta_{ab}, \qquad f_{\pi} = 92.4$$
MeV.

低エネルギー定理

低エネルギーでの NG ボソンの相互作用は、対称性の破れのパターン G/H と 崩壊定数 f_{π} だけで決まる。

O(N)線形シグマ模型での π - π 散乱を例にとって考える。 ポテンシャル

$$V = \frac{\lambda}{4} \left(|\vec{\phi}|^2 - v^2 \right)^2 = \lambda v^2 \sigma^2 + \lambda v \sigma |\vec{\pi}|^2 + \frac{\lambda}{4} |\vec{\pi}|^2 |\vec{\pi}|^2 + \cdots$$

 π - π 散乱に効くダイアグラムは 2 種類



$$\mathcal{M}(ij \to kl) = \left[-2\lambda + \frac{4\lambda^2 v^2}{M_{\sigma}^2 - s}\right] \delta_{ij} \delta_{kl} + \text{crossed}.$$

 $M_{\sigma}^2 = 2\lambda v^2$ に注意すると

$$\mathcal{M}(ij \to kl) = \left[-2\lambda + \frac{4\lambda v^2}{2\lambda v^2 - s} \right] \delta_{ij} \delta_{kl} + \text{crossed}$$
$$\simeq \frac{s}{v^2} \delta_{ij} \delta_{kl} + \frac{t}{v^2} \delta_{ik} \delta_{jl} + \frac{u}{v^2} \delta_{il} \delta_{jk}, \quad \text{for } s, t, u \ll M_{\sigma}^2.$$

- 低エネルギーでの散乱振幅は、崩壊定数 $v(= f_{\pi})$ のみで決定され、 もともとの相互作用の大きさ λ には依存しない。
- ゼロエネルギー s = t = u = 0 では、ふたつのダイアグラムの寄与 がキャンセルして NG 粒子の散乱振幅が 0 になる。(相互作用が小 さくなる)

もうちょっとだけチェック

線形 O(N) シグマ模型のポテンシャルを拡張して

$$V = \frac{\lambda}{4} \left(|\vec{\phi}|^2 - v^2 \right)^2 + \frac{\lambda_6}{12} \left(|\vec{\phi}|^2 - v^2 \right)^3 + \cdots$$

としてみても、

$$|\vec{\phi}|^2 - v^2 = 2v\sigma + \sigma^2 + |\vec{\pi}|^2$$

より、 λ_6 以上の項は $\sigma\pi\pi$ や $\pi\pi\pi\pi$ バーテックスを出さず、ツリーレベ ルの $\pi\pi$ 散乱には寄与しない。

 \Downarrow

任意のポテンシャルについて、低エネルギーの $\pi\pi$ 散乱振幅は崩壊定数 $v(= f_{\pi})$ のみで決まる。

$$\mathcal{M}(ij \to kl) \simeq \frac{s}{v^2} \delta_{ij} \delta_{kl} + \frac{t}{v^2} \delta_{ik} \delta_{jl} + \frac{u}{v^2} \delta_{il} \delta_{jk}.$$

§.2. 非線形シグマ模型

高エネルギーでの様々な理論



NG ボソンの低エネルギー有効ラグランジアン

非線形シグマ模型を作る上での要請

- もとの理論の対称性の破れの構造 *G*/*H* とコンシステント
- NG ボソンのみを含むミニマルなラグランジアン

カイラルラグランジアン

QCD におけるカイラル対称性の破れ $(N_f = 2 \text{ 0}$ 場合) $G/H = SU(2)_L \times SU(2)_R/SU(2)_V$ の低エネルギー有効ラグランジアンを作りたい。 線形シグマ模型を経由したカイラルラグランジアンの導出 $SU(2)_L \times SU(2)_R$ 対称性をもつ線形シグマ模型 $\mathcal{L} = \frac{1}{4} \operatorname{tr} \left((\partial_\mu \Phi)^{\dagger} (\partial^\mu \Phi) \right) - V(\operatorname{tr}(\Phi^{\dagger} \Phi)), \qquad \Phi = \phi_0 + i \sum_{a=1}^{3} \tau^a \phi_a.$

 au^a はパウリのスピン行列

● (2行2列の行列)の変換

 $\Phi \to \Phi' = g_L \Phi g_R^{\dagger}, \qquad g_L \in SU(2)_L, \quad g_R \in SU(2)_R.$

ポテンシャル
$$V = \frac{\lambda}{4} \left(\frac{1}{2} \operatorname{tr}(\Phi^{\dagger} \Phi) - v^{2} \right)^{2}$$

による ⊕ の真空期待値

$$\langle 0|\Phi|0
angle = \left(egin{array}{cc} v & 0 \\ 0 & v \end{array}
ight)$$

によって、対称性は $SU(2)_V$ に自発的に壊れる。 NG ボソン π :

$$\phi_a = \pi_a, \quad (a = 1, 2, 3), \qquad \phi_0 = v + \sigma.$$

QCD と同一の対称性の破れの構造: $G/H = SU(2)_L \times SU(2)_R / SU(2)_V$

 \Downarrow

この線形シグマ模型の NG ボソンの低エネルギーでの相互作用は、 QCD のパイオンの低エネルギーでの相互作用と同じになるハズ



これからやること。 線形シグマ模型から、NG ボソン以外の自由度 (σ) を消去する。 非線形シグマ模型の構築 ● の「極座標」分解

$$\Phi = (v + \sigma)U, \qquad U = \exp\left(\frac{i\tau^a \pi^a}{v}\right).$$

 $SU(2)_L \times SU(2)_R$ の変換: $\Phi \to g_L \Phi g_R^{\dagger}$

$$U \to U' = g_L U g_R^{\dagger}, \qquad \sigma \to \sigma' = \sigma.$$

この表示では、 σ は $G = SU(2) \times SU(2)$ の singlet であり、Gのもと で変換しない。したがって、線形シグマ模型のラグランジアン

$$\mathcal{L} = \frac{1}{4} \operatorname{tr} \left(\left(\partial_{\mu} (v + \sigma) U \right)^{\dagger} \left(\partial^{\mu} (v + \sigma) U \right) \right) - \frac{\lambda}{4} \left((v + \sigma)^{2} - v^{2} \right)^{2}$$

から G のもとで変換しない自由度 σ を凍結 ($\sigma = 0$) させても対称性は 保たれる。

非線形シグマ模型: $\mathcal{L} = \frac{v^2}{4} \operatorname{tr} \left(\left(\partial_{\mu} U \right)^{\dagger} \left(\partial^{\mu} U \right) \right).$

 $G/H = SU(N_f)_L \times SU(N_f)_R/SU(N_f)_V$ の非線形シグマ模型 (カイラ ルラグランジアン) への拡張:

$$\mathcal{L} = \frac{f_{\pi}^2}{4} \operatorname{tr} \left(\left(\partial_{\mu} U \right)^{\dagger} \left(\partial^{\mu} U \right) \right), \qquad U = \exp \left(\frac{2iT^a \pi_a}{f_{\pi}} \right).$$

Uは $N_f \times N_f$ のユニタリー行列。 T^a $(a = 1, 2, \dots, N_f^2 - 1)$ は $SU(N_f)$ 変換の生成子。

注意: π^a の $SU(N_f)_L \times SU(N_f)_R$ 変換

$$\exp\left(\frac{2iT^a\pi'_a}{f_\pi}\right) = g_L \exp\left(\frac{2iT^a\pi_a}{f_\pi}\right)g_R^{\dagger},$$

を $\pi'_a = \dots$ の形で表そうとすると、非線形な変換になっている。

CCWZ (Callan-Coleman-Wess-Zumino)の処方箋 (一般の *G*/*H* 上の非線形シグマ模型を構成するために)

コセット空間 G/H に値をとる NG ボソンの場 ξ を考える。

$$\xi(\pi) = \exp\left(\frac{i}{f}\sum_{a} X^{a}\pi_{a}\right), \qquad G/H$$
の代表元



 $\xi(\pi)$ を $g \in G$ で変換する。

$$g\xi(\pi)$$
 : $\exp\left(\frac{i}{f}\sum_{a}X^{a}\pi_{a}\right)$ の形にならない!!

変換後にもとの $\exp(iX..)$ の形に戻すには

 $\xi(\pi) \to \xi(\pi') = g\xi(\pi)h^{\dagger}$





ここまでで NG ボソンの場 $\xi(\pi)$ とその変換性

$$\xi(\pi) = \exp\left(\frac{i}{f}X^a\pi_a\right), \qquad \xi(\pi) \to \xi(\pi') = g\xi(\pi)h^{\dagger}$$

が決まったので、あとはこの変換のもとで不変なラグランジアンを作れば良い。

H で変換する量

 $\xi^{\dagger}\xi = 1.$ (ラグランジアンの構築には使えない) $\alpha_{\mu} \equiv \frac{1}{i} \partial_{\mu} \xi^{\dagger} \xi.$ (Maurer-Cartan 1-form)

 $g \in G$ のもとでの α_{μ} の変換

$$\alpha_{\mu} \to h \alpha_{\mu} h^{\dagger} + \frac{1}{i} \partial_{\mu} h h^{\dagger}, \qquad h = h(g, \pi).$$

方針:破れずに残った対称性 H で分類する。 α_{μ} は G の生成子の値を持つ。これを H での既約分解する。 $\alpha_{\mu} = \alpha_{\parallel\mu} + \alpha_{\perp\mu}^{(1)} + \alpha_{\perp\mu}^{(2)} + \cdots$ α_{\parallel} : H の生成子、 α_{\perp} : G/H の生成子 α_{μ} の変換性 $\alpha_{\mu} \to h\alpha_{\mu}h^{\dagger} + \frac{1}{i}\partial_{\mu}hh^{\dagger}$ から、 $\alpha_{\parallel\mu} \to h\alpha_{\parallel\mu}h^{\dagger} + \frac{1}{i}\partial_{\mu}hh^{\dagger}$, $\alpha_{\perp\mu}^{(1)} \to h\alpha_{\perp\mu}^{(1)}h^{\dagger}$, \cdots

非線形シグマ模型のラグランジアン

$$\mathcal{L} = f_{(1)}^2 \operatorname{tr} \left(\alpha_{\perp \mu}^{(1)} \alpha_{\perp}^{(1)\mu} \right) + \cdots.$$

具体例 $G/H = SU(N) \times SU(N)/SU(N)$ のカイラル対称性 コセットG/H [T^a はSU(N)の生成子]

$$\xi = \exp\left(\frac{iX^a \pi^a}{f}\right), \qquad S^a = \begin{pmatrix} T^a & \\ & T^a \end{pmatrix}, \quad X^a = \begin{pmatrix} T^a & \\ & -T^a \end{pmatrix},$$

$$\xi = \begin{pmatrix} \xi_L & \\ & \xi_R \end{pmatrix}, \qquad \xi_L = \exp\left(i\frac{T^a\pi^a}{f}\right), \quad \xi_R = \exp\left(-i\frac{T^a\pi^a}{f}\right).$$

1-form の既約分解

$$\alpha_{\mu} = \frac{1}{i} \partial_{\mu} \xi^{\dagger} \xi = \begin{pmatrix} \alpha_{L\mu} & \\ & \alpha_{R\mu} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \alpha_{\parallel\mu} & \\ & \alpha_{\parallel\mu} \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \alpha_{\perp\mu} & \\ & -\alpha_{\perp\mu} \end{pmatrix}$$
$$\alpha_{L\mu} = \frac{1}{i} \partial_{\mu} \xi^{\dagger}_{L} \xi_{L}, \quad \alpha_{R\mu} = \frac{1}{i} \partial_{\mu} \xi^{\dagger}_{R} \xi_{R}, \quad \alpha_{\parallel\mu} = \frac{1}{2} (\alpha_{L\mu} + \alpha_{R\mu}), \quad \alpha_{\perp\mu} = \frac{1}{2} (\alpha_{L\mu} - \alpha_{R\mu})$$

$$\begin{aligned} \partial_{\mu}\xi_{L}^{\dagger}\xi_{L} &= \partial_{\mu}(\xi_{L}^{\dagger}\xi_{L}) - \xi_{L}^{\dagger}\partial_{\mu}\xi_{L} = -\xi_{L}^{\dagger}\partial_{\mu}\xi_{L} \ \boldsymbol{\epsilon}\boldsymbol{\phi}\boldsymbol{\delta}\boldsymbol{\epsilon} \\ \alpha_{\perp\mu} &= \frac{1}{2i}\left(\partial_{\mu}\xi_{L}^{\dagger}\xi_{L} - \partial_{\mu}\xi_{R}^{\dagger}\xi_{R}\right) = \frac{i}{2}\left(\xi_{L}^{\dagger}\partial_{\mu}\xi_{L} + \partial_{\mu}\xi_{R}^{\dagger}\xi_{R}\right) \\ &= \frac{i}{2}\xi_{L}^{\dagger}\partial_{\mu}(\xi_{L}\xi_{R}^{\dagger})\xi_{R} = \frac{i}{2}\xi_{L}^{\dagger}\partial_{\mu}U\xi_{R}, \qquad U \equiv \xi_{L}\xi_{R}^{\dagger}, \quad U \to U' = g_{L}Ug_{R}^{\dagger}. \end{aligned}$$

CCWZ の処方箋によるラグランジアン

$$\mathcal{L} = f^2 \operatorname{tr} \left(\alpha_{\perp \mu} \alpha_{\perp}^{\mu} \right) = -\frac{f^2}{4} \operatorname{tr} \left(U^{\dagger} \partial_{\mu} U U^{\dagger} \partial^{\mu} U \right)$$
$$= \frac{f^2}{4} \operatorname{tr} \left(\partial_{\mu} U^{\dagger} \partial^{\mu} U \right)$$

となって、前に作ったラグランジアンに一致。

具体例 G/H = SU(N)/SO(N): (the littlest Higgs)

コセット空間

$$\xi = \exp\left(\frac{i}{f}X^{a}\pi^{a}\right), \qquad (X^{a})^{T} = X^{a}, \qquad (S^{\alpha})^{T} = -S^{\alpha}.$$
$$\alpha_{\mu} = \frac{1}{i}\partial_{\mu}\xi^{\dagger}\xi, \qquad \alpha_{\perp\mu} = \frac{1}{2}\left[\alpha_{\mu} + (\alpha_{\mu})^{T}\right], \qquad \alpha_{\parallel\mu} = \frac{1}{2}\left[\alpha_{\mu} - (\alpha_{\mu})^{T}\right].$$
$$\alpha_{\perp\mu} = \frac{1}{2i}\left(\partial_{\mu}\xi^{\dagger}\xi + \xi^{T}\partial_{\mu}\xi^{*}\right) = \frac{1}{2i}\xi^{T}\partial_{\mu}(\xi^{*}\xi^{\dagger})\xi$$

$$= \frac{1}{2i} \xi^T \partial_\mu U^{\dagger} \xi, \qquad \qquad U \equiv \xi \xi^T, \quad U \to g U g^T.$$

CCWZ の処方箋によるラグランジアン

$$\mathcal{L} = f^2 \operatorname{tr}(\alpha_{\perp\mu}\alpha_{\perp}^{\mu}) = -\frac{f^2}{4} \operatorname{tr}(U\partial_{\mu}U^{\dagger}U\partial^{\mu}U^{\dagger}) = \frac{f^2}{4} \operatorname{tr}(\partial_{\mu}U^{\dagger}\partial^{\mu}U).$$

§.3. 非線形シグマ模型の摂動展開

ふつうの意味では「くりこみ」はできないが.....

NG ボソンの散乱振幅 (ツリーレベル)

• 4 次発散 $\frac{\Lambda^4}{f^4}$: 低エネルギー定理と矛盾するので、 regularization が対称性を保てば現れない • 2 次発散 $\frac{\Lambda^2}{f^4}E^2$: 崩壊定数 f のくりこみで吸収 • $\frac{1}{\sqrt{\pi}}$ • \log 発散 $\frac{1}{f^4}E^4\log(\Lambda^2/E^2)$ log 発散を「くりこむ」には、微分を 4 つ含むカウンタータームを導入 すればよい。

$$\mathcal{L}_{4} = y_{1} \operatorname{tr}(\alpha_{\perp\mu} \alpha_{\perp}^{\mu} \alpha_{\perp\nu} \alpha_{\perp}^{\nu}) + y_{2} \operatorname{tr}(\alpha_{\perp\mu} \alpha_{\perp\nu} \alpha_{\perp}^{\mu} \alpha_{\perp}^{\nu}) + y_{10} \operatorname{tr}(\alpha_{\perp\mu} \alpha_{\perp}^{\mu}) \operatorname{tr}(\alpha_{\perp\nu} \alpha_{\perp}^{\nu}) + y_{11} \operatorname{tr}(\alpha_{\perp\mu} \alpha_{\perp\nu}) \operatorname{tr}(\alpha_{\perp}^{\mu} \alpha_{\perp}^{\nu}).$$

「くりこみ」後の散乱振幅 (schematic form)

$$\mathcal{M} \sim \frac{E^2}{f^2} + \frac{E^4}{f^4} \left[y_i^r(\mu) + \frac{\Gamma_{yi}}{2(4\pi)^2} \log \frac{\mu^2}{E^2} \right], \qquad \mu: \ \boldsymbol{\zeta} \ \boldsymbol{\mathcal{I}} \ \boldsymbol{\mathcal{I}} \ \boldsymbol{\mathcal{I}} \ \boldsymbol{\mathcal{I}} \ \boldsymbol{\mathcal{I}} \ \boldsymbol{\mathcal{I}} - \boldsymbol{\mathcal{I}} \boldsymbol{\mathcal{I}}.$$

- ループ展開は、エネルギー E によるシステマッティクな展開。
- 散乱振幅に $E^4 \log E^2$ の項 (カイラルログ) が現れる。
- カイラルログは崩壊定数 f のみで決定される。(Γ_{yi} は計算で求め られる量)
- 背後にある模型の特徴が係数 y_i^r に現れる。

散乱振幅 \mathcal{M} はくりこみスケールによらないはず \downarrow y_i^r のくりこみ群方程式 "Renormalization Group Equation" (RGE)

$$\mu \frac{d}{d\mu} y_i^r(\mu) = -\frac{\Gamma_{yi}}{(4\pi)^2}.$$

 $SU(N_f)$ のカイラルラグランジアンで具体的に計算すると、

$$\Gamma_{y1} = \frac{2}{3}N_f, \quad \Gamma_{y2} = \frac{1}{3}N_f, \quad \Gamma_{y10} = 1, \quad \Gamma_{y11} = 2.$$

QCD でのカイラル対称性の破れとカイラル摂動論 $m_u = m_d = m_s = 0$ のとき厳密な $SU(3) \times SU(3)$ カイラル対称性 NG ボソン: π, K, η 3次元エルミート行列 *A*, *B* のみたす恒等式 $tr(ABAB) = -2tr(A^2B^2) + \frac{1}{2}tr(A^2)tr(B^2) + (tr(AB))^2.$ カウンターターム $\mathcal{L}_4 = (y_1 - 2y_2) \operatorname{tr}(\alpha_{\perp\mu} \alpha_{\perp}^{\mu} \alpha_{\perp\nu} \alpha_{\perp}^{\nu}) + (y_{10} + \frac{1}{2}y_2) \operatorname{tr}(\alpha_{\perp\mu} \alpha_{\perp}^{\mu}) \operatorname{tr}(\alpha_{\perp\nu} \alpha_{\perp}^{\nu})$ $+(y_{11}+y_2)\operatorname{tr}(\alpha_{\perp\mu}\alpha_{\perp\nu})\operatorname{tr}(\alpha_{\perp}^{\mu}\alpha_{\perp}^{\nu})$ $= L_1 \left(\operatorname{tr}(\partial_{\mu} U^{\dagger} \partial^{\mu} U) \right)^2 + L_2 \operatorname{tr}(\partial_{\mu} U^{\dagger} \partial_{\nu} U) \operatorname{tr}(\partial^{\mu} U^{\dagger} \partial^{\nu} U)$ $+L_3 \operatorname{tr}(\partial_{\mu} U^{\dagger} \partial^{\mu} U \partial_{\nu} U^{\dagger} \partial^{\nu} U).$

Gasser-Leutwyler のパラメータ

$$L_1 = \frac{1}{16}(\frac{1}{2}y_2 + y_{10}), \quad L_2 = \frac{1}{16}(y_2 + y_{11}), \quad L_3 = \frac{1}{16}(y_1 - 2y_2).$$

 $L_1, L_2, L_3 \mathcal{O} \operatorname{RGE}$

$$\mu \frac{d}{d\mu} L_i^r(\mu) = -\frac{\Gamma_i}{(4\pi)^2},$$

$$\Gamma_1 = \frac{1}{16} (\frac{1}{2} \Gamma_{y2} + \Gamma_{y10}), \quad \Gamma_2 = \frac{1}{16} (\Gamma_{y2} + \Gamma_{y11}), \quad \Gamma_3 = \frac{1}{16} (\Gamma_{y1} - 2\Gamma_{y2}),$$

RGE の係数

$$\Gamma_1 = \frac{3}{32}, \qquad \Gamma_2 = \frac{3}{16}, \qquad \Gamma_3 = 0.$$

Gasser-Leutwyler による $\pi\pi$ 散乱のフィット ($\mu = 550$ MeV), $L_1^r = (0.9 \pm 0.3) \cdot 10^3$, $L_2^r = (1.7 \pm 0.7) \cdot 10^3$, $L_3^r = (-4.4 \pm 2.5) \cdot 10^3$.

c.f., 1 ループ輻射補正のオーダー評価

$$\frac{\Gamma_i}{(4\pi)^2} \simeq \begin{cases} 0.6 \times 10^3, & (i=1) \\ 1.2 \times 10^3, & (i=2) \\ 0 & (i=3) \end{cases}$$

クォークの質量の効果を取り入れたより現実的な取り扱い クォークの質量

$$\mathcal{L}_{\text{mass}} = (\bar{u}_L, \bar{d}_L, \bar{s}_L) M_q \begin{pmatrix} u_R \\ d_R \\ s_R \end{pmatrix} + h.c., \qquad M_q = \begin{pmatrix} m_u \\ m_d \\ m_s \end{pmatrix}$$

spurion の考え方が便利。形式的な SU(3) のカイラル変換

$$q_L \to g_L q_L, \quad q_R \to g_R q_R, \quad M_q \to g_L M_q g_R^{\dagger}, \qquad q_L \equiv \begin{pmatrix} u_L \\ d_L \\ s_L \end{pmatrix},$$

のもとでは、クォークの質量項は不変。クォークの質量の効果まで取り 入れたカイラルラグランジアンはこの対称性を持つはず。

$$\mathcal{L} = \frac{f^2}{4} \operatorname{tr}(\partial_{\mu} U^{\dagger} \partial^{\mu} U) + \frac{f^2}{4} \operatorname{tr}(\chi^{\dagger} U + U^{\dagger} \chi), \qquad U \to g_L U g_R^{\dagger}, \quad \chi \equiv 2BM_q.$$

$$U = \exp\left[i\frac{\sqrt{2}}{f} \begin{pmatrix} \frac{1}{\sqrt{2}}\pi^{0} + \frac{1}{\sqrt{6}}\eta & \pi^{+} & K^{+} \\ \pi^{-} & -\frac{1}{\sqrt{2}}\pi^{0} + \frac{1}{\sqrt{6}}\eta & K^{0} \\ K^{-} & \bar{K}^{0} & -\frac{2}{\sqrt{6}}\eta \end{pmatrix}\right]$$

NG ボソンの質量

$$M_{\pi}^2 = (m_u + m_d)B, \quad M_{K^{\pm}}^2 = (m_u + m_s)B,$$

 $M_{K^0}^2 = (m_d + m_s)B, \quad M_{\eta}^2 = \frac{1}{3}(m_u + m_d + 4m_s)B.$
c.f., $M_{\pi} \simeq 140$ MeV, $M_K \simeq 500$ MeV.

オーダーカウンティング

 π などの質量を E^2 に勘定するためには

$$\chi \equiv 2BM_q \sim \mathcal{O}(E^2)$$

1ループのくりこみに必要なカウンターターム

$$L_{4} \operatorname{tr}(\partial^{\mu} U^{\dagger} \partial_{\mu} U) \operatorname{tr}(\chi^{\dagger} U + U^{\dagger} \chi) + L_{5} \operatorname{tr}(\partial^{\mu} U^{\dagger} \partial_{\mu} U(\chi^{\dagger} U + U^{\dagger} \chi))$$
$$+ L_{6} \left(\operatorname{tr}(\chi^{\dagger} U + U^{\dagger} \chi) \right)^{2} + L_{7} \left(\operatorname{tr}(\chi^{\dagger} U - U^{\dagger} \chi) \right)^{2}$$
$$+ L_{8} \operatorname{tr}(\chi^{\dagger} U \chi^{\dagger} U + U^{\dagger} \chi U^{\dagger} \chi)$$

RGE の係数

$$\Gamma_4 = \frac{1}{8}, \quad \Gamma_5 = \frac{3}{8}, \quad \Gamma_6 = \frac{11}{144}, \quad \Gamma_7 = 0, \quad \Gamma_8 = \frac{5}{48}$$

Gasser-Leutwyler によるフィット ($\mu = 550 \text{MeV}$),

 $L_4^r = (0 \pm 0.5) \cdot 10^3, \quad L_5^r = (2.2 \pm 0.5) \cdot 10^3, \quad L_6^r = (0 \pm 0.3) \cdot 10^3,$ $L_7^r = (-0.4 \pm 0.15) \cdot 10^3, \quad L_8^r = (1.1 \pm 0.3) \cdot 10^3.$

たいていの係数の大きさは $\Gamma_i/(4\pi)^2$ 程度。

クォークとの結合

$$\mathcal{L}_{\text{QCD}} - \bar{q}_L \gamma^{\mu} L_{\mu} q_L - \bar{q}_R \gamma^{\mu} R_{\mu} q_R, \qquad q_L \equiv \begin{pmatrix} u_L \\ d_L \\ s_L \end{pmatrix},$$

 L_{μ}, R_{μ} は 3×3 エルミート行列の外場。QED のフォトンを表す場合は

$$L_{\mu} = R_{\mu} = eQA_{\mu}, \qquad Q = \begin{pmatrix} \frac{2}{3} & 0 & 0\\ 0 & -\frac{1}{3} & 0\\ 0 & 0 & -\frac{1}{3} \end{pmatrix}$$

「ゲージ」化されたカイラル対称性

$$q_L \to g_L(x)q_L, \qquad L_\mu \to g_L(x)L_\mu g_L^{\dagger}(x) + i\partial_\mu g_L(x)g_L^{\dagger}(x),$$

$$q_R \to g_R(x)q_R, \qquad R_\mu \to g_R(x)R_\mu g_R^{\dagger}(x) + i\partial_\mu g_R(x)g_R^{\dagger}(x).$$

外場 L_{μ} , R_{μ} との結合を含めたカイラルラグランジアンはこのゲージ 対称性を持つはず。微分を「共変微分」

 $D_{\mu}U = \partial_{\mu}U + iL_{\mu}U - iUR_{\mu}$

に置き換える。

オーダーカウンティング

 $L_{\mu}, R_{\mu} \sim \mathcal{O}(E).$

1ループのくりこみに必要なカウンターターム $\mathcal{O}(E^4)$

 $iL_9 \operatorname{tr}(L_{\mu\nu}D^{\mu}UD^{\nu}U^{\dagger} + R_{\mu\nu}D^{\mu}U^{\dagger}D^{\nu}U) + L_{10}\operatorname{tr}(L_{\mu\nu}UR^{\mu\nu}U^{\dagger}),$ $L_{\mu\nu} \equiv \partial_{\mu}L_{\nu} - \partial_{\nu}L_{\mu} + i[L_{\mu}, L_{\nu}], \qquad R_{\mu\nu} \equiv \partial_{\mu}R_{\nu} - \partial_{\nu}R_{\mu} + i[R_{\mu}, R_{\nu}].$

RGE の係数

$$\Gamma_9 = \frac{1}{4}, \qquad \Gamma_{10} = -\frac{1}{4}.$$

Gasser-Leutwyler によるフィット ($\mu = 550 \text{MeV}$),

 $L_9^r = (7.4 \pm 0.7) \cdot 10^3, \qquad L_{10}^r = (-6.0 \pm 0.7) \cdot 10^3.$

1ループ輻射補正のオーダー評価

$$\frac{\Gamma_i}{(4\pi)^2} \simeq \begin{cases} 1.6 \times 10^3, & (i=9) \\ -1.6 \times 10^3, & (i=10) \end{cases}$$

よりもかなり大きい。

QCD でのカイラル対称性の破れの特徴 \uparrow 比較的軽い ρ メソン ($J^{PC} = 1^{--}$)の存在 ($M_{\rho} \simeq 770 \text{MeV}$)

脱線

 ρ メソンの L_9, L_{10} への寄与

$$L_9|_{\rho} = -L_{10}|_{\rho} = \frac{1}{4} \frac{f_{\rho}^2}{M_{\rho}^2}, \qquad f_{\rho}^2 \simeq 2f_{\pi}^2,$$

 $f_{\pi} = 92.4 \text{MeV}, M_{\rho} = 770 \text{MeV}$ を用いると

$$L_9 = 7.2 \times 10^{-3}, \qquad L_{10} = -7.2 \times 10^{-3}.$$

Gasser-Leutwyler のフィットの値と非常に良い一致。

ρ メソンまで含めたカイラル摂動論の構築

- M. Tanabashi, "Chiral perturbation to one loop including the rho meson," Phys. Lett. B **316**, 534 (1993) [arXiv:hep-ph/9306237].
- M. Harada and K. Yamawaki, "Hidden local symmetry at loop: A new perspective of composite gauge boson and chiral phase transition," Phys. Rept. 381, 1 (2003) [arXiv:hep-ph/0302103].

「QCD でのカイラル対称性の破れとカイラル摂動論」のまとめ $\mathcal{O}(E^2)$ のラグランジアン

 $\mathcal{L}_{2} = \frac{f^{2}}{4} \operatorname{tr}(D_{\mu}U^{\dagger}D^{\mu}U) + \frac{f^{2}}{4} \operatorname{tr}(\chi^{\dagger}U + U^{\dagger}\chi), \qquad U \to g_{L}Ug_{R}^{\dagger}, \quad \chi \equiv 2BM_{q}.$ $\mathcal{O}(E^{4}) \, \mathfrak{O} \! \ni \! \mathfrak{I} \! \ni \! \mathfrak{I} \! \ni \! \mathfrak{I} \! \mathfrak{I} \! \mathfrak{I}$

$$\begin{aligned} \mathcal{L}_{4} &= L_{1} \left(\operatorname{tr}(D_{\mu}U^{\dagger}D^{\mu}U) \right)^{2} + L_{2} \operatorname{tr}(D_{\mu}U^{\dagger}D_{\nu}U) \operatorname{tr}(D^{\mu}U^{\dagger}D^{\nu}U) \\ &+ L_{3} \operatorname{tr}(D_{\mu}U^{\dagger}D^{\mu}UD_{\nu}U^{\dagger}D^{\nu}U) \\ &+ L_{4} \operatorname{tr}(D^{\mu}U^{\dagger}D_{\mu}U) \operatorname{tr}(\chi^{\dagger}U + U^{\dagger}\chi) + L_{5} \operatorname{tr}(D^{\mu}U^{\dagger}D_{\mu}U(\chi^{\dagger}U + U^{\dagger}\chi)) \\ &+ L_{6} \left(\operatorname{tr}(\chi^{\dagger}U + U^{\dagger}\chi) \right)^{2} + L_{7} \left(\operatorname{tr}(\chi^{\dagger}U - U^{\dagger}\chi) \right)^{2} \\ &+ L_{8} \operatorname{tr}(\chi^{\dagger}U\chi^{\dagger}U + U^{\dagger}\chi U^{\dagger}\chi) \\ &+ iL_{9} \operatorname{tr}(L_{\mu\nu}D^{\mu}UD^{\nu}U^{\dagger} + R_{\mu\nu}D^{\mu}U^{\dagger}D^{\nu}U) + L_{10} \operatorname{tr}(L_{\mu\nu}UR^{\mu\nu}U^{\dagger}). \end{aligned}$$

RGE:

$$\mu \frac{d}{d\mu} L_i^r(\mu) = -\frac{\Gamma_i}{(4\pi)^2},$$

Gasser-Leutwyler によるフィット ($\mu = 550 \text{MeV}$)

	値	Γ_i		値	Γ_i
L_1^r	$(0.9 \pm 0.3) \cdot 10^{-3}$	$\frac{3}{32}$	L_6^r	$(0 \pm 0.3) \cdot 10^{-3}$	$\frac{11}{144}$
L_2^r	$(1.7 \pm 0.7) \cdot 10^{-3}$	$\frac{3}{16}$	L_7^r	$(-0.4 \pm 0.15) \cdot 10^{-3}$	0
L_3^r	$(-4.4 \pm 2.5) \cdot 10^{-3}$	0	L_8^r	$(1.1 \pm 0.3) \cdot 10^{-3}$	$\frac{5}{48}$
L_4^r	$(0 \pm 0.5) \cdot 10^{-3}$	$\frac{1}{8}$	L_9^r	$(7.4 \pm 0.7) \cdot 10^{-3}$	$\frac{1}{4}$
L_5^r	$(2.2 \pm 0.5) \cdot 10^{-3}$	$\frac{3}{8}$	L_{10}^{r}	$(-6.0 \pm 0.7) \cdot 10^{-3}$	$-\frac{1}{4}$

文献

- J. Gasser and H. Leutwyler, "Chiral Perturbation Theory To One Loop," Annals Phys. **158**, 142 (1984).
- J. Gasser and H. Leutwyler, "Chiral Perturbation Theory: Expansions In The Mass Of The Strange Quark," Nucl. Phys. B **250**, 465 (1985).
- J. F. Donoghue, E. Golowich and B. R. Holstein, "Dynamics Of The Standard Model," Cambridge Monogr. Part. Phys. Nucl. Phys. Cosmol. 2, 1 (1992).
- M. Bando, T. Kugo and K. Yamawaki, "Nonlinear Realization And Hidden Local Symmetries," Phys. Rept. **164**, 217 (1988).
- M. Harada and K. Yamawaki, "Hidden local symmetry at loop: A new perspective of composite gauge boson and chiral phase transition," Phys. Rept. 381, 1 (2003) [arXiv:hep-ph/0302103].